【公益財団法人　沖縄県労働者福祉基金協会】

1．中間報告書　（2024 年 10 月 21 日）

活動実施期間	2024 年　4 月　1 日　～　2024 年　9 月　30 日

【上期の活動内容】

①働く人を対象にした「意外と知らない働くときのルール。安心して働くために」をテーマにセミナーを実施した。

講師は特定社会保険労務士・特定行政書士　上里朝也氏を招聘し、基本的な社会保障制度や労働法の知識取得を目的に実施した。テキストは、当法人が昨年度発刊した「わった～社会人」の冊子を活用した。

セミナーでは、代休や振休の違いに関することや、ストレスチェックの義務づけ、所属する就業規則の確認ができること等、テーマにあるように、意外と知らなかった内容だったとの声が多く上がった。

参加者からは、下記のような声があがった。

「社会人として、働く上でのルールや社会保険制度について学ぶ機会は滅多にないため、今回、このような機会を作ることができ、改めて学び直しの機会になっていると感じた」

「意外と知らない働くときの約束事である、労働契約や就業規則について見直すことが出来たとの声もあった」

このようなセミナーを通して、意外と知らない情報を知り再確認することで、参加者の安定した雇用の継続と確保に繋がると考える。

②11 月 2 日に、大阪府西成高校で反貧困学習を通して、成果を上げてきた山田校長先生を招聘し、講演会を開催するための事前調整等準備をおこなった。

反貧困学習では、単に知識を得るだけではなく、現実社会の中のそれぞれの立場の苦しさを知った上で、どうするべきなのかを学校の授業を通して、議論するものである。そうした活動を通じて、生徒たちは自分の考えや課題を整理しつつ、対処法を学んでいくことができる。

また、当日は、講演会以外に、支援機関の方々とのグループワークも実施する。

その他、自立を見据えた子どもたちを対象に、県内の児童園でお片付けコンサルタントを招聘し、お片付けセミナーを実施する予定である。

③- 1

支援者のための支援員研修では、マネジメントクラスを対象に、沖縄大学の島村先生を招聘し、スーパーバイズ研修を 4 回実施した。

スーパーバイズ研修とは、研修会を通し、これから取り組もうとする支援、または今、取り組んでいる支援について、スーパーバイザーにアドバイス・指導をしてもらうことで、現場の人材を支え育成し、組織力を高めることを目的としている。

今回、各グループより支援現場における事例を一つ提供してもらい、ワークを通して、事例の深

活動写真①

社会保険制度や労働法に関するセミナーのようす

活動写真②

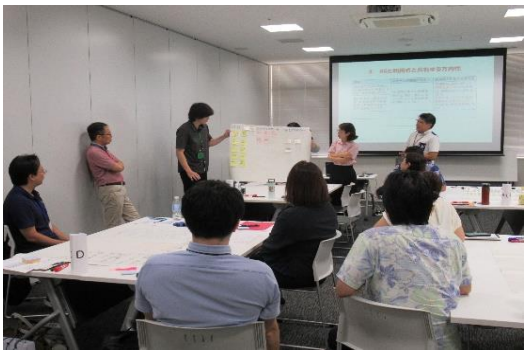
反貧困学習西成高校　講演会チラシ

堀りをした。深堀りの内容を全体で共有し、スーパーバイザーより事例に対して、アドバイスを頂いた。
　研修会を通して、参加者より下記のような声があがった。
「支援員（ワーカー）を鏡にして利用者を見ていくという先生の言葉がとても勉強なったので、今後相談があった際は、意識してアドバイスなどをしていきます」
「答えが見つからない困難なケースが多く、自分に何ができるんだろう、と悩みながらの毎日ですが、相談者には寄り添いつつ、ケースについては深く思い悩み留まるのではなく、シンプルに考え、今自分ができることを一つずつ確実に行っていくことができればと思います」

③−2
5 月に実施したインプロセミナーは、インプロオキナワ代表 渡辺奈穂氏を講師として招聘した。
研修では、インプロ（即興劇）を通して、コミュニケーション技術や組織力を高めるチームビルディングの構築、相手への思いやりや自己表現力を培うことで、職場内や支援の現場において、より円滑な業務を遂行できることを目的に実施した。
参加者からは「インプロ体験を通して、凝り固まった思考を柔軟にし、相手の気持ちを汲み取る練習や自分の気持ち楽しく相手に伝えることを学ぶことができたと思う」との声が上がった。

③-3
7月は、子育てや家庭のために頑張る沖縄県内の女性の自立支援と子どもの貧困解決に取り組んでいる、女性を元気にする会 代表ゴージャス理枝氏を招聘し講演会を開催した。講演内容は、日々、現場で貧困課題に当事者と向き合い、活動される様子や当事者のリアルな生活状況などを知ることができた。講師のゴージャス理枝さんの活動内容は、食糧支援の枠に収まらず、一人ひとりの状況をきちんと把握し、目の前にいる困っている人を心から助けようと日々現場で尽力されている様子を伺うことができた。講演会後のアンケートから、下記のような声があがった。
「知らない現実に心が重くなりながらも、強い気持ちで支援しているゴージャスさんの活動に心打たれました」
　多くの支援員がゴージャスさんの日々の活動支援に感銘を受けていた。
上半期は、専門的な支援者スキルアップのためのセミナーや、他の支援機関の代表の講演会を通して、職員の日々の業務の動機付けなど、モチベーションアップにもつながったのではないかと思う。

活動写真③-１
スーパーバイズ研修会



活動写真③-２
インプロセミナー

③-３
講演テーマ「食糧支援で繋がる困窮世帯！負の連鎖を断ち切り一歩前進！！！」

【公益財団法人　沖縄県労働者福祉基金協会】

2．完了報告書 （2025 年4月8日）

活動実施期間	2024 年 10 月 1 日　～　2025 年 3 月 31 日

【下期の活動内容】
①年末お福分け会でのリユース市と就労訓練

・ **日程：**
2024 年 12 月 28 日 10:00-14:00

・ **場所：**グッジョブセンターおきなわ及び
沖縄市雇用促進等施設(BC コザ)

・ **年末お福分け会来場世帯：**
327 世帯

・ **訓練参加人数：**
13 名（20 代～40 代の男女）

・ **訓練の目的：**
- 就労困難者に対し、実践的な作業経験の機会を提供
- 衣服の仕分け作業（子ども服、大人服、男女別）を通じて分類力や整理整頓のスキルを習得
- 工賃の支給により、働くことに対する達成感や金銭的報酬の意義を体感し、今後の就労意欲の向上を図る
- 地域支援活動に関わることで社会とのつながりを実感する機会の提供

・ **訓練の内容：**
当協会では、困窮世帯や低所得世帯を対象に安心して年末年始を過ごしてもらうことを目的に、食料や衣類を無料配布する「年末お福分け会」を、那覇市のグッジョブセンターおきなわ、沖縄市雇用促進等施設(BC コザ)の 2 拠点で開催した。それぞれの拠点にて食料品の配布と、協力機関より無料提供いただいた新品同様の古着やファッション雑貨、子ども服等リサイクル品の配布を行うリユース市を設けた。
今回は、県内で生活困窮者等を対象とした就労準備支援事業を担う那覇市・沖縄市・沖縄県パーソナルサポートセンター（各自治体福祉部からの受託）と、就職困難者を対象とした就労支援事業を担う沖縄県おしごと応援センター One × One（県商工労働部雇用政策課からの受託）それぞれの利用者の就労訓練の一貫としてリユース市で提供する衣類の仕分け、ハンガー掛け、ショーケースへの陳列作業を実施した。

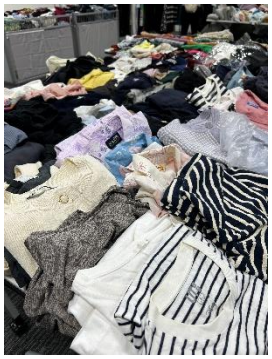
・ **成果：**
1. 服の種類や陳列方法について利用者同士で声を掛け合い質問をするなど、積極的にコミュニケーションを取る場面も多く見られ、日ごろの支

活動写真①

↑農林中央金庫から衣類の提供をいただいた

↑協力機関から新品同様の衣類やファッション雑貨の提供をいただいた

↑就労訓練参加者へは事前に年末お福分け会の目的と就労訓練の作業詳細をお伝えし、参加の意思を確認した。



援の成果が確認できる機会となった。
2. 年末お福分け会の来場世帯からは、「最近は物価高で生活に余力がない。食料の提供はありがたい」「子どもの式服や体育着があると助かる」といった声があがった。

・ **所感：**
今後も様々な相談者や世帯のニーズを拾いつつ、人と地域社会とが繋がりを感じられるような訓練を併せ多面的な支援を実践していきたい。

・ **支出：**
- 工賃（年末リユース訓練,13 名）14,500 円
- リユース品クリーニング代 8,060 円
- フィッティングルーム,シングルラック,
  他レンタル 53,680 円

・ **協力機関：**
- 日本労働組合総連合会沖縄県連合会
- 沖縄県労働金庫
- こくみん共済 COOP 沖縄推進本部
- 沖縄県勤労者互助会
- グッジョブセンターおきなわ
- NPO 法人フードバンクセカンドハーベスト沖縄
- 国際フードバンク ヘルプオキ
- 全日本港湾労働組合
- 株式会社 湧川商会
- 農林中央金庫那覇支店

↑子どもや大人服、男女別の仕分けと、来場者が手に取りやすいよう考慮し衣類を陳列した。

↑2 拠点で開催した年末お福分け会会場。当日は多くのボランティアにも参加いただき、活気に溢れた雰囲気となった。

↑当日のリユース市。試着室も設け、買い物感覚で楽しみながら衣類を選んでもらった。

↑就労訓練参加者への工賃の受け渡し。

②支援員向け Canva/Scratch 勉強会

・日程：
2024 年 12 月 24 日 10:00-12:00

・場所：
グッジョブセンターおきなわ PC 研修室

・参加者：
生活・就労支援員（14 名）

・勉強会の目的：
- Canva や Scratch といったデジタルツールを用いて、就労困難・引きこもり傾向にある若者の「居場所づくり」や「自己表現の手段」として活用できるかを検討するため
- 今後の就労支援・生活支援プログラムにおいて、若者の興味関心を軸にした新たなア

活動写真②

↑講師の説明を聞きながら canva を体験する。

プローチを取り入れる可能性を探るため

－

・勉強会の内容：

沖縄県における若年層(15 歳～29 歳)の完全失業率は全国平均と比較して高い傾向にあり、例えば令和 5 年 10 月のデータでは、沖縄県の若年層完全失業率は 7.7%、全国平均の 4.1%を大きく上回っている。当センターの就労支援プログラム利用者においても若年層の参加率は一定数いて、就労意欲がない、就労経験が一度もない、引きこもり傾向にある、といった地域社会との繋がりが希薄である場合が多い。そのような若年層が興味を持ち、自身の強みを発見し、就労意欲に繋げられるプログラムを検討するために今回の勉強会を企画した。

Canva は誰でも簡単にチラシやポスター、SNS 画像などのデザインができる無料ツールで、デザインや IT の知識が無くても直感的に操作できるため、すでに多くの企業で活用されている。Scratch は、子どもや初心者向けのプログラミング学習ツールで、難しいコードを書かずにブロックを組み合わせるだけで、ゲームやアニメーションを作ることができる。遊びながらプログラミングの基本を学び、その後 IT 業界への就労に向けて意欲向上に繋がる可能性がある。

今回の勉強会では Canva/Scratch の講師によるツールのデモンストレーションを実施した。

・成果：

1. 支援員から「興味を持ちそうな相談者はいる」「居場所としての活用はあり」という意見があり、ツール導入による就労準備プログラムに前向きな反応が得られた
2. Canva や Scratch といったツールの特性を活かし、「IT への興味」「自己表現」「成功体験の提供」といった支援要素を組み込んだプログラムの可能性を確認できた

・所感：

参加した支援員から、興味を持ちそうな相談者はいて、安心して社会と繋がることができる「居場所」として活用できそうとプログラム導入に前向きなコメントを得た。

Canva は、就職に直結する技術ではないものの多くの企業で求められているスキルであり、操作ができる旨を履歴書へ記載したり、面接でアピールすることもできる。さらにプラスアルファのスキルを身につけることは求職者の自己肯定感の向上にもつながり、前向きな求職活動を実現できるため、今後も就労支援の一貫として活用していきたい。

なお支援員自身が IT スキルに自信がないこともプログラムを取り入れる上での懸念点ということで、初めのうちは外部講師を導入してのプログラムか、引き続き支援員向けの勉強会の開催を行っていきたい。

↑インターネットが繋がっていれば、誰でも簡単にデザイン性のあるチラシ等の作成が可能。

・支出：
講師謝金

- Canva/scratch 東 由希恵 氏 8,000 円

③沖縄県立石嶺児童園での整理収納セミナー

・ **日程：**
2024 年 12 月 4 日 10:00-12:00（職員 22 名）
2024 年 12 月 18 日 10:00-12:00（職員 10 名）
2024 年 12 月 26 日 10:00-12:00（小学生 17 名）
2024 年 12 月 26 日 13:00-15:00（中学生 12 名）
2024 年 2 月 11 日 13:00-15:00（高校生 17 名）
2024 年 3 月 9 日 13:00-16:00（高校生 14 名）

・ **場所：**
沖縄県立石嶺児童園

・ **セミナーの目的：**
- 施設という共同生活の場でも、自身の持ち物を管理する意識と責任感を持たせる
- 施設を退所し家族の元に戻る児童や、成長し自立を控えた児童が、退園後も衣食住のコントロールを継続して実践できるようにする
- 職員には、整理収納について児童へ継続的に指導し支援することが児童の心の安定や自己管理能力、自己肯定感の向上に繋がることを共通認識として持ってもらうことで、インケアの質向上を図る

・ **セミナーの内容：**
沖縄県立石嶺児童園は保護者のない児童、虐待されている児童その環境上養護を要する児童を入所させ擁護している。一般的な家庭とは異なる施設という環境で共同生活を送る児童にとって、生活用品を自身の責任で管理する機会が少なかったり、清潔な空間を自ら保つ必要性を理解してもらうことが難しい、との施設側からの要望に応じて「整理収納セミナー」を企画した。施設を退所し家族の元に戻る児童や、成長し自立を控えた児童が、退園後も衣食住のコントロールを継続して実践できることを目的としている。

年齢に応じたセミナー内容を構成するため、小学生、中学生、高校生と分けて講座を開催した。小中学生の中には、整理収納に苦手意識を持っている児童も多かったが、カードを使ってゲーム感覚で仕分けを体験してもらうことで、コツさえ掴めば誰でも上手にお片付けをすることができると自信を持ってもらう内容とした。仕分け作業が早く上手にできた子については、今後も「褒める」ことを中心に整理収納が本人の自信

活動写真③

↑中学生向け整理収納講座。カードを使い仕分けを体験してもらった。

↑職員向け整理収納講座。整理収納が子どもの非認知能力の向上に繋がることを学んだ。

↑高校生向け整理収納講座。自己実現を叶えるために衣食住のコントロールが必要であり、整理収納はその一助となることを伝えた。

に繋がるように、サポートするよう職員へ伝えた。
　高校生においては、卒園を目前に控えていることもあり、より自立の準備に重点を置いてセミナーを開催。セミナーを二回に分け、1 回目に整理収納のメリットと手順を伝え、自身で実践した結果を 2 回目でフォローアップする構成とした。セミナーの中では、衣食住を自身でコントロールすることが自己実現の一歩であることを中心に伝えた。
　職員においては、整理収納を習慣化することで、論理的思考や自己肯定感を高めるなど、児童の非認知能力の向上にも繋がることを伝えた。職員の共通認識のもとで継続して整理収納について指導、支援してもらいたい。

・ **成果：**

1. 高校生の参加者のうち 1 名は、セミナー後に自室での個別の指導を希望し、講師と共に衣装ケースの整理を実施した。綺麗に整った空間を見て、嬉しそうに笑顔を見せた。「卒園したら県外の大学へ進学したいから今のうちに練習しておきたい」と自立に向けて前向きに取り組む様子が見られた。
2. 児童園の職員からは「職員研修含め、ここまでの講座を独自で企画することは難しく大変助けになった。」「整理収納を通して、生きる力を育んで欲しい。」「このセミナーをきっかけに、児童の自立に向けた意識付けをどのように行っていくかもっと考えていきたい」との声を頂いた。

・ **所感：**

　児童園で暮らす児童が整理収納を習慣化していくためには、職員が共通意識を持って継続して声を掛け指導していくことと、児童自身が整理収納は難しいものではなく、自分が生きたい人生を叶えるための一歩であることを理解することが重要である。今後、同士で整理収納について話題にしたり、得意な児童から友達や家族に教えてあげるなどしながら、今回の機会を生かしてもらいたい。

・ **支出：**

講師謝金
- お片付けｾﾐﾅｰ 渡名喜一珠美氏 91,040 円
- お片付けｾﾐﾅｰ 玉城恵利子氏 76,624 円

↑座学と併せて、文房具、カトラリー、衣類、布団の整理収納を学んだ。

③子どもの社会的・文化的体験

・ **日程：**

2025 年 3 月 25 日 9:00～15:00

・ **参加者：**

母子生活支援施設（3 年生～6 年 4 名）
県内の児童館(3 年生～6 年 4 名）
大学生ボランティア(3 名）
職員引率(4 名）

活動写真③

・ **場所：**
沖縄都市モノレール（ゆいレール），
チームラボ「学ぶ！未来の遊園地　沖縄」，
沖縄県立博物館，洋食レストラン

・ **体験の目的：**
- 家庭環境に左右されることなく、すべての子どもが多様な体験を通じて自己の可能性を広げられるようにするため
- 異年齢や異なる立場の人との関わりを通じて、子どもたちの社会性や協調性を育むため
- 五感を使った学びや文化的体験を通して、子どもたちの感性や知的好奇心を刺激し、豊かな心を育てるため

・ **体験の内容**

家庭環境に左右されず、子ども達が多様な人と様々な体験をすることで、本来持っている能力や感性が育っていくことを目的に、県内の児童館や母子生活支援施設に通う子ども達を対象とした春休みの一日体験プログラムを企画した。

沖縄県立博物館では、常設展にて沖縄の自然や歴史、文化について興味深く見て回りながら、実生活で見聞きした経験や、学校で学んだことなど会話しながら楽しく見学した。

「チームラボ　学ぶ！未来の遊園地　沖縄」はデジタルコンテンツを活用した遊び場となっており、体を動かしながら音や光の反応を五感で楽しんだ。一人ひとり好きなエリアや遊びが異なり、子ども達それぞれの個性の違いが感じられる時間となった。

洋食レストランでの食事では、その日の出来事を楽しく会話しながら、大きなオムライスを、残さないようにと頑張って食べていた様子が印象的だった。

後日、体験に参加した子どもの通う施設の職員から「子どもが体験に参加した感想を楽しそうに話す姿を見て、母親から改めてこの企画の趣旨を聞かれた。「＜ろうきん＞働く人と子どもの明日（あした）を応援プロジェクト」の目的と、その一環として本プロジェクトが開催されたことを伝えると、とても有難い経験だと喜んでいた」とコメントを頂いた。

・ **成果：**

1. 子どもたちは日常と異なる環境での集団行動を通して、協調性をもって楽しく行動することができた。
2. それぞれが個性を活かしながら、デジタルアートや博物館での学び、外食体験を楽しみ、知的・感性的な刺激を受ける機会となった。
3. 参加した子どもたちからは「楽しかった」「また行きたい」といった前向きな声が多数寄せられた。
4. 子どもの中には新しい環境に躊躇する子もい

↑モノレール乗車体験。「１度は家族で乗ったことがある」「車内は揺れるので捕まえないといけない」などと話し、緊張しながら乗車した。

↑県立博物館にて、沖縄で昔使用されていた道具に触れる。大学生ボランティアと会話をしながら楽しく体験していた。

↑「チームラボ　学ぶ！未来の遊園地　沖縄」にてデジタルコンテンツ体験。

たが、最後まで参加できたことで自信につながった。
5. 子どもの親についても、子の将来の可能性を広げるために体験の機会の提供が大事である旨を理解してもらえた。

・ **所感：**

今回のプログラムを通して、子どもたちは普段接する友人や大人とは異なる関係性や環境の中で、新たな刺激と発見を得ることができたと感じる。特に今回のプログラムに参加することを躊躇していた子どもにとっては、参加できたことが自信に繋がる。また親においても、体験に参加する前後の子どもの変化から、体験の機会を提供することが将来の可能性を広げるという意識付けになることを期待する。

今後は、地域の児童館等に通っていないような、地域社会との繋がりが不足している子どもたちやその保護者も対象に広げたプログラムへの展開を検討していきたい。

・ **支出：**

- ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ謝金（学生,3 名）21,520 円
- ﾓﾉﾚｰﾙ移動 6,720 円
- 博物館・ﾁｰﾑﾗﾎﾞ入場料 28,110 円
- 食事ﾏﾅｰ体験（子ども 8 名,大人 7 名）20,950 円

↑洋食レストランにて。サラダ、スープ、メイン料理を注文し、会話を楽しみながらいただいた。